

救いの証（あかし）

私は仏壇も神棚もある、ごく普通の日本の家庭で育ちました。家族はクリスチャンではありませんので、今も毎年何かしらの法事がありますし、お盆やお彼岸にはお寺にもお墓参りにも行きます。キリスト教のキの字にもおわないような家庭で育った私がなぜ救われたのかをお話しします。

私には同じ歳のAちゃんという従姉妹がいて、彼女は生まれた時から心臓の病気を患っていました。小学校に上がる前、祖母は私とAちゃんにランドセルを買ってくれました。けれど、Aちゃんは1年生になる前に死んでしまいました。鮮明に覚えているのは、火葬場で棺の周りに祖母や大人たちが集まっていて、中を覗き込みながらワンワン泣いている光景です。私は死がまだ良く分かっていません。ただ大人が子供みたいに泣いているので不思議だなあと感じていました。

小学生になり、1年生も終わる頃、テレビのドキュメンタリー番組を見ました。1987年3月16日放送のNHK特集『剛亮(ごうすけ)生きてや～脳死を見つめた78時間～』という番組です。臓器移植についてのドキュメンタリーだったようですが、私にとっては、同じくらいの歳の男の子がダンプカーにはねられて死んでしまった、という衝撃的な番組でした。『生きてや！！ごうすけ！！』という剛亮くんのお父さんの悲痛な叫びは、30年経った今でも耳に残っています。私は死の持つ悲しみや苦しみ、絶望感を知りました。それから私は毎日のように、死んだらどうなるんだろう、と考えるようになり、剛亮くんのように小さくても死ぬかもしれない、死ぬのは怖い、と泣きながら夜中に目覚めるようにもなりました。

それ以降も、小2の時に、友達の家が火事になり、友達のお母さんと妹さん二人が亡くなってしまったり、小4の時に、兄の同級生が生体肝移植を受けたものの助からず、亡くなってしまったなど、死の存在はいつも身近にあり、私を怖がらせました。そして中学2年の秋、同級生の女の子が殺される事件があったのです。仲が良かったわけではありませんが、ショックで全校朝会の後、保健室のベッドでずっと休んでいたことを記憶しています。また、学年の全員が彼女の顔を見にお宅へ伺った際も、私は頑なに拒否し、行きませんでした。怖くて死を受け入れたくなかったのです。それでも小学生の頃と違い、恐怖だけではなく、命を大切にし、精一杯生きていこうという強い思いが与えられました。

時は過ぎ、高校を卒業した私は上京し、音楽学校に入学しました。そこで、クリスチャンホームで育ったという女の子に出会ったのです。彼女の見た目はまさに都会のギャル。バッチリメイクに下着の見えそうな短いスカート、そして厚底サンダル。私とは世界の違う子だと思いました。しかしなぜか仲良くなり、彼女は私にイエス・キリストの話をするようになりました。私は外見と話す内容のギャップがすごいので、わりと興味深く聞いていたと思います。彼女の通う教会で毎月ゴスペルライブをやっているから、そこでピアノを弾いてほしいと頼まれ、それ以来毎月教会でピアノを弾くようになりました。これが私と教会との出会いです。

そして世の中がミレニアムと騒いでいた2000年。音楽学校を卒業した私たちはそれぞれアルバイトをしながら音楽活動を続けました。その生活に慣れ始めた5月14日の夜。高校時代のバスケット部のキャプテンから電話が入りました。私は高校で女子バスケットボール部のマネージャーをしていました。あまりに辛く厳しい練習だったので、入部当初16人いた部員は、卒業時には半分の8人になっていました。だからこそ励まし合って乗り越えてきた8人はとても絆が強く、今でも変わらずに連絡を取る大切な仲間です。ですから、その時も特に突然の電話とも思わず「ほいほい」と出た気がします。しかし電話の向こうはいつもと様子が違います。「落ち着いて聞いてね。今日北海道でB子が殺されたの。明日にはニュースになるから監督が動揺させないように今夜中に連

絡回せて。」必死に冷静であろうとする声でした。B子はその8人の内の一人です。言葉を失いました。東京在住組は飛行機で北海道に向かい、火葬に参加することになりましたが、その時も私は意気地なしで行けませんでした。私は直接八戸へ向かい、八戸在住組と合流しました。車を用意し、八戸駅でB子のお母さんを待ちました。B子の家は母一人、子一人の母子家庭です。骨壺に収まってしまった小さなB子を抱きしめて階段を降りてくるお母さんの姿を見て私たちの方が泣いてしまいました。ちょうどその日に北海道で犯人が捕まったと聞かされました。B子の部屋にラジカセを盗みに入った犯人とB子が運悪く鉢合わせしたそうです。B子のお母さんは「あの子のことだから大騒ぎしたんでしょうね。だから犯人も焦ったんでしょうね。でも殴って気絶させれば良かったのに…。何も殺してしまわなくてもよかったのに…。」そうつぶやきました。泣いても泣いてもB子は戻りません。くやしさを、悲しさを、怒りを、たくさんの感情が渦巻いて、私は再び死が全ての終わりであると感じました。

そして同じ年の2000年12月。今度は音楽学校の仲間であり、私にとって1番の理解者だったC君が死んだと連絡が入りました。アルバイト先の工事現場での作業中、クレーンが命綱のついた足場を引っかけてしまい、命綱もろとも13階から2階まで落下したというのです。これまで私は遺体に会うことを頑なに拒んできましたが、この時はみんなと一緒にC君の元へ向かいました。信じたくありませんでした。きっと嘘だ。間違いだ。C君が死んじゃうわけない。絶対嘘だ。強く祈りながら向かいました。しかし棺の中に入っていたのは、顔が歪んだC君でした。仲間みんなで泣き叫びました。私はこんな時いつも一番そばで慰めてくれたのがC君でしたので、どうすれば良いか分かりません。仲間たちは同じ悲しみに向き合っていますから助けを求められません。実家の親に電話してみましたが、どんな言葉も慰めに感じません。泣いても泣いても涙は枯れず、終わりのない苦しみのように思いました。

この悪夢のような12月から何日後だったのか今もわかりません。年末でしたので15日以内であることは確かです。今度は音楽学校の違うグループの仲間から電話がありました。私が以前組んでいたバンドのボーカルだった、D君という男の子が交通事故で死んだというのです。D君は原付バイクに乗っていましたが、ヘルメットを付けて超がつくほど真面目で安全運転する子です。事故なんて起こすわけがないと思いました。聞くと、飲酒運転の車に撥ねられたとのこと。全部夢であってほしい。そう思いました。連日泣き倒れていた私はお通夜にもお葬式にも行けない、そう力なく伝えたと思います。相手も事情を知っていたので理解してくれました。

A子は殺された。B君は落とされた。C君は撥ねられた。みんな二十歳で、未来に向かって生きてたのに。身勝手にA子を殺した犯人は生きていて、注意力を欠いてB君をクレーンで落としたりした人も生きていて、飲酒したのに車に乗ってC君を撥ねた人も生きている。なぜ3人の方が死ななくてはならなかったのか。目の前の全てが色を失くして見えました。時間が止まることなく動いていることも不思議に思えました。未来どころか明日を思った時、墨汁をぶちまけたように真っ黒でした。絶望です。どっちにしたって死ぬんだ。人はみんなどうやって生きてても最後は死ぬんだ。生きる意味なんてない。私は死のうと思いました。無心で死に場所に向かい、そこで一旦座りました。ふと残された家族のことを思いました。A子のお母さんや、B君の家族が悲しみ、苦しむ姿が浮かび、私も家族を同じ目に遭わせようとしているんだと思いました。しかも、最悪な方法です。中学の時、命を大切に精一杯生きていこうと決めたことも思い出されました。でもとにかく目の前が真っ黒で生きていける気がしません。感情と理性が格闘します。その時、錯乱状態の私は伝道してくれた彼女に電話をしていたのです。無意識でしたので後から聞きましたが、私は電話で「助けて！教会に連れて行って！」と言ったそうです。私の状況を察した彼女と、同じくクリスチャンである彼女のお母さんが、電話で声をかけながら私をその場から離れさせ、家まで誘導してくれました。私はこうして生かされました。その後八戸に帰省し、3か月間静養しつつ、もらった新約聖書をポツリポツリと読みました。そして4月に東京へ戻り、教会へ通い、2000年7月に洗礼を受

けたのです。あの時の電話は、神様が繋いでくれたと今でも信じています。

私は自分が苦しみから逃れるために、藁にも縋る思いで信じました。聖書が何を語っているか、人の罪とはいったい何なのか、十字架の贖いとは何か、そんなことは二の次でした。でも振り返るとそれで良かったのだと思います。信じることと理解することは違うからです。それらは信じた後に嫌と言うほど神様が直接教えてくださいました。仮にあの頃、キリスト教を理解していたとしても私は性格上信じるには至らなかったと思います。

こうして洗礼を受けた私は超ハッピーな毎日を送っています。なんていうことは全くありません。洗礼を受けてから今に至るまで、それはそれはジェットコースターのようなスリル満点な人生を神様は送らせてくださっています。クリスチャンになってからの「イエス様と綾子の東京珍道中」のような日記が今でもネットにあがっていますので、暇でしかたないという方は覗いてみてください。その日記にも書いていますが、私にとって生きることは9割しんどいです。正直しんどいことばかりです。しかし信仰を持つてからは常に天国への希望があります。ゲームですと死はゲームオーバーですが、私たちが造られた神様は、私たちに永遠の命と天国というハッピーエンドを用意してくださいました。これが私を死の恐怖から解放し、絶望の底から再び人生を歩めるようにしてくださったのです。この世でイエス・キリストを信じたらもれなく10年間の天国生活がついてきます、と言われたら私はちょっと考えてしまうかもしれません。しかし永遠の命であれば今生きている地上での歩みなんて一瞬です。それを思うと多少しんどくても気持ちが軽くなるのです。

5年前に命に関わる病名を医者から告げられた時、私は「ああこれで休める、天国だ」と本気で思いました。不幸なのか幸いなのかいまだに分かりませんが天国行きは叶わず病気は癒されました。今再び余命宣告を受けたとしても同じです。徒歩で向かっている天国への道の途中、神様がプライベートジェットを飛ばして迎えにきてくださるような感覚すらあります。また、先日夢を見たのですが、コンビニに殺人鬼が入ってきて、私に向かってきました。逃げましたが、夢の中というのは水の中のように前に進みません。あっと言う間に追いつかれ、押し倒されました。馬乗りになった殺人鬼が刃渡り30センチはあろうかというナイフを振り上げます。普通ならこの辺でガバッと目が覚めて、「夢か、ハアハア」となるのですが、目が覚めません。私はもう刺されるという瞬間、「神様ー!!!」と叫びました。すると目の前いっぱい光が輝き、心の中が平安で溢れました。目が覚めたとき、なんて幸せな夢!と思ったほどです。私は、いつも共にいてくださる神様は死の瞬間も共にいて、痛みや苦しみを覚える前に天国に連れて行ってくださると確信しました。この世において一番の絶望を与える死に打ち勝ってくださったイエス・キリスト、十字架上で私の罪を贖い、天国行きリストに入れてくださったイエス・キリストに心から感謝し、天国生活への希望だけを握って残りのしんどい人生も歩ませて頂きたいと思います。

最後に御言葉を二つご紹介します。

『この希望は失望に終わることがありません。ローマ 5:5』

『わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるものとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。ヨハネ 14:27』